

お見合いから数日、そう、一週間と経たない日のことでした。初めてのデートのお誘いです。心が躍らずにはられません。

「じゃ、競技場の門の脇で」

「えっ、競技場？」

なんと、待ち合わせ場所は、街はずれの陸上競技場だと言うのです。ポカんとした私の顔の前には、それ以上に怪訝そうな彼の表情がありました。

『そういえば、この人、駅伝チームのエースだったんだ』

母が「新聞にも時々載る有名人だよ」と言っていたのを思い出した。なんとなく納得できそうな自分と、戸惑いを隠しきれないもう一人の自分がいたのを今でもよく覚えています。

約束の日の記憶と云えば――。白い綿毛の坊主頭のタンポポで覆われた観覧席代わりの土手。夕暮れ時の誰もいないグラウンド。その周囲をただ歩き回るだけの二人。それに――

『傍目にはロマンティックなカップルに見えるかなあ』

なんて考えていた私――



実はこのころ私には、ひそかに思いを寄せている男性がいました。この方は野球部の選手で、陸上競技部のお見合い相手と所属は違うものの、同じ親会社の社員でした。実業団スポーツが盛んな時期でしたから、野球部と陸上競技部は、ある種のライバル関係にもあったそうです。

野球部の男性とは幼なじみで職場も同じでしたから、互いに気兼ねなく話し合えるような関係でした。私の中にも恋心のようなものがあったかも知れません。ただ、それが確かなものだと思えたのは、人づてに「婚約したようだ」という話を耳にしたときでした。

『もう、あきらめるしかない』

私に縁談が持ち上がったのは丁度そのころで、気が付くと私の青春時代はあつという間に過ぎて行ってしまいました。

後日談になるのですが、ほろ苦い経験から二十数年後にこの野球部の男性と偶然に会うことができました。その彼が当時の思い出話をしてくれたのです。

「僕はエッチちゃんのが好きだったんだ。長男だけど婚養子に入るのには何の障害もなかったから、できれば結ばれたかった」

本当に驚きました。

そういえば、と思い起こしたのは、縁談がまとまりかけたころにこの方が昼休みに散歩に誘ってくれたことです。誘ってくれたのに、一言も話さずに一時間ほどなんとはなしに二人で過ごしただけでした。

その話をする、彼はこう言うのです。

「エッチちゃんがお見合い結婚をするなんて思っていなかったから、その話を伝え聞いて動揺し、何か言いたかったけれど言葉にならなかった」。

まるで「すれ違いドラマ」のようなのですが、「懐かしい昔話」ということでお互いに笑って話したものです。

さて、私たちの――駅伝の彼との――結婚生活はというと、こちらもその後ドラマのような展開が待っていたのです。